

くはらふさのすけ 久原房之助

日立の大煙突生みの親 日立市



(日鉱記念館提供)

明治2年(1869) - 昭和40年(1965)。長門国萩〔山口県萩市〕生まれ。慶應義塾卒業後森村組を経て、明治24年(1891)、叔父藤田伝三郎が経営する藤田組に入社。同年閉山の危機にあった小坂鉱山(秋田県)に赴任し、国内有数の銅山として再建。明治38年(1905)に赤沢銅山を買収し日立鉱山と改称。大正初期には足尾、別子、小坂と肩を並べる日本の4大銅山の一つに成長させる。大正元年(1912)に久原鉱業株式会社を設立。日立製作所をはじめ、海運、水産、電力など多角的に事業を展開し、大実業家として活躍。また銅生産増大に伴う煙害問題を、大正3年(1914)に当時世界一高い大煙突を建設し解決する。没後、昭和43年(1968)に県知事により明治百年記念特別功績者として表彰される。

久原房之助は長門国萩〔山口県萩市〕の久原家の四男として生まれました。父の庄三郎は、弟の藤田伝三郎が経営する藤田組の仕事を手伝うために単身大阪に行っていました。房之助が11歳の時に一家そろって大阪に転居しました。

明治19年(1886)、慶應義塾に入学し、卒業後は貿易商社森村組に入社しました。房之助は、森村組社長の森村市左衛門の人格に魅力を感じ、森村組で外国貿易の仕事をしたいと強く望んでいたのです。父親たちは当時名も知られていない森村組に入社することに反対しましたが、房之助は周囲の反対を押し切って入社します。(会社が有名であるかどうかは問題ではない。仕事は信用と社会の利益のためにするものであり、それを実践している社長のいる森村組に何としても入りたい。)

こうして森村組に入社した房之助は、神戸支店の倉庫番として一生懸命働き、入社して1年あまり後、仕事ぶりが認められてニューヨーク支店の駐在員に選ばれました。しかし、経営が苦しくなっていた藤田組からの強い要請により、やむをえず森村組を退社し、藤田組に入ることになりました。

明治24年(1891)に藤田組が経営する秋田県の小坂鉱山に赴任し、経営の立て直しに成功した房之助は、これを機会に独立しようと考えました。そして明治38年(1905)、多賀郡日立村〔日立市〕にある赤沢銅山を買取り、日立鉱山として経営をはじめました。

房之助のもとには、小平浪平(P.13参照)など小坂鉱山の時の優秀な部下が集まってきました。最新の設備や機械を入れて、大規模に経営しなければならぬと考えた房之助は、水力発電所の



倒壊前の日立鉱山の大煙突

建設や鉱石を掘る機械の導入などを、驚異的な速さで進め、日立鉱山を近代的な鉱山に発展させました。この近代化には大変苦労しましたが、

(いろいろ考えて、他の人より早く物事を進めることが大切だ。)という房之助の強い意志とすぐれた経営手腕によって、日立鉱山は、大正初期には足尾(栃木県)、別子(愛媛県)、小坂と並ぶ日本の4大銅山の一つになりました。

ところが銅生産の増大に伴って、煙害<煙やガスなどの害>が広がってきました。鉱山がある日立村をはじめ周辺の村の山林や農作物に大きな被害を与え、住民からの訴えも激しくなるなど、大きな問題となりました。

(この問題を解決しなければ、鉱山はつぶれてしまう。そして、何よりも住民たちの生活も守ってあげないといけない。何としても解決したい。)

房之助は、地域の住民との話し合いを続けたり、害を少なくする方法をいろいろ試したりしていましたが、なかなか解決できませんでした。そこで、小坂鉱山の時の経験から、(煙はまっすぐ上るから、煙突を高くすれば被害が減るかもしれない。)と考えました。煙突を高くしたら被害地が広がると反対されましたが、「この判断は、日立鉱山だけではなく、これからの日本の鉱業界に必ず役に立つ。」と主張し、高い煙突の建設を決断しました。大正3年(1914)、当時としては世界一高い155.7mの大煙突を建設し、煙害を減らすことに成功しました。

(平成5年に煙突の上部が倒壊して、現在はもとの3分の1の高さになっています。)

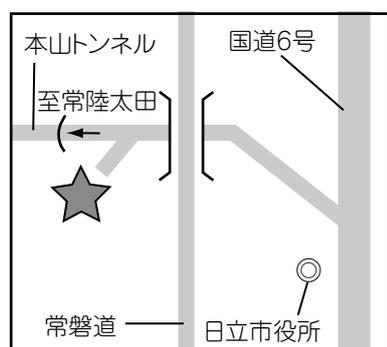
こうして日立鉱山の経営に成功した房之助は、日本有数の工業都市として発展している現在の日立市の礎を築いたのです。

ゆがりのスポットに行ってみよう

日鉱記念館

所在地 日立市宮田町3585

内容 日立鉱山の歴史や大煙突に関する資料が展示されています。



おもな 参考文献

『久原房之助』(日本鉱業株式会社・1970)

『郷土史にかがやく人びと』(青少年育成茨城県民会議・1971)